

〔和漢文操錄七〕俎板銘

岸昨囊

日新兮日古 朔云兮晦云 豎象一年往 橫準四時懸 三日節獻鶴 七種粥糲芹 惠王何遠

厨 孔子未學軍 子攘羊隱父 臣烹兒饗君 抑鱸身欲滑 解鮪髭爲斷 鎌矛頻令響 納豆

坐所聞 天命畏河豚 我生宜海雲 爭忘菑蕪鏞 縱嗅雌雉薰 寧識無絃趣 質而且有文

〔芙蓉文集下〕俎板

信夫

俎板あり其形机に似て兩脚に工みなせる彫物もなく又我家に用る二見形の類ひにもなしさながら陶家の無絃の琴に倣かよひて臺所の二助三助も明てはたき暮てはをさむ花鳥雪月のまじはりもひたぶる此調度の左右にありて七種の拍子のふつかなるは此國の古風の殘けんかゝたはしくぞ覺ゆ天王寺の樂もいにしへを失はぬよし兼好法師も沙汰し侍りき氷るばかりになん冬の月のものすごきに隣はいまだねすやあらん鳥の骨たくはかまびしくも又床し祖翁も洛の旅寢に納豆切音まばしまてとも興せられしなり○下

〔元祿五年〕萬買物調方記諸工商人所付 いろは分

ま 大坂之分 まないた 道修町 はしりや

庖丁

〔下學集下〕器財庖丁ハウチヤウ名也又屠兒之

〔書言字考節用集七〕器財庖丁ハウチヤウ一名庖子所以宰割肉者蓋庖丁

○ナガ菜刀ナガ本朝俗截野菜之
○ハ短片刀謂之菜刀
○ハ出齒ハ庖丁ハ又

菜刀泉州堺津所出者

〔東雅器用〕器用俎マナイタ略○中 倭名鈔に割刀訓は見えず俗には庖丁といふ也莊子に見えし庖丁

の事によりて宰割を執るものを庖丁人などいひ其用ゆる所の刀をもまたかく名づけしと見えたり

〔倭訓栞中編十七〕ながたな 西土も菜刀といふ也開元式の食刀も同じ昔の劔今の菜刀といふ